リヒトホーフェン
江戸から長崎への旅（1861年）

上 村 直 己 訳

Die Reise von Yedo nach Nagasaki im Jahre 1861 von Ferdinand Frhr. v. Richthofen

übersetzt von Naoki Kamimura

はじめに

今回訳出したのは，地質学者・地理学者フェルディナンド・フライヘル・フォン・リヒトホーフェン（Ferdinand Freiherr von Richthofen, 1833-1905）が幕末にオイレンブルク伯爵を団長としたプロイセン使節団の学術員（地質学）として来日した際の日本滞在日記の一部である。周知のように1861年1月24日（万延元年12月12月14日）日本とプロイセンの間で修好通商条約の仮調印がなされた。その後オイレンブルク一行は帰国することとなり，同月29日江戸沖を発ち，途中横浜に寄港し，31日に同港を発ち長崎へ向かった。訳出した部分はこの時の体験を記したものであり，原文にはタイトルはないが，ここでは内容から便宜上「江戸から長崎への旅」と名付けた。

帰国に際して一行が搭乗した艦船は気走「アルコナ」号（2,320トン）と帆走「テーティス」号（1,533トン）である。リヒトホーフェンは，公使館付フォン・ブラント，動物学者フォン・マルテンス，商人ヤーコプ，園芸師ショットミュラーとともに「テーティス」号に乗り，公使オイレンブルク伯は，公使館書記官ピーシェル，同随行員アウグスツ・ツー・オイレンブルク伯，フォン・ブンゼン，ルチウス博士，商人シュピース，画家ハイネ，写真師ビスマルク，画家ベルクとと

もに「アルコナ」号に乗っていた。航海は江戸湾を出てると北東からの暴風のために難航した。予定のコースをはずれ，しばしば流された。また風が収まると，「アルコナ」号は「テーティス」号を曳航しなければならなかった。そのために横浜から長崎まで，通常は４～６日で行けるのを18日もかかった。

リヒトホーフェンの日本滞在記の特色は，彼自身の専攻を反映して岩石，山岳，火山，鉱山，景観などに関する記述が多く見られることだが，今回は船上にいた期間が長く，比較的それが少ない。それでも，船上から見た佐多岬の細かい描写や，火山の硫黄島（別名・鬼界ケ島）を見て「私は島に上陸して，この島のために数時間を過ごすことをどんなに願ったことか」と書いているのはリヒトホーフェンならではのことであろう。そして彼は長崎でも周辺の山を熱心に探訪している。ポンペ，シーボルト，司馬凌海につての人物評は興味深い。また，幕末の長崎におけるロシア人の活躍にも注目している。

江戸を離れるに際し，彼が見た江戸地方の状態について記した両親への手紙を挿入しているが，これは数日分まとめて記したり，記述がない日があったりするのと同様，船上では特に記すべきことがなかったためでもあろう。

訳出に当たっては参考のために旧暦を添えた。なお＜　＞内の語は訳者が補ったものである。

（1861）

１月29日　火曜日［万延元年12月19日］

今朝９時に「アルコナ」号は「テーティス」号と並んで抜錨した。オイレンブルク伯は昨日悪天候にもにもかかわらず大した式典もなく乗船した。総督たちは最後までそこに残り，オイレンブルク伯から外国の公使たちの退去に関して外務卿に宛てた覚書を受け取った。その際目立ったのは伯が重要な発言権を持っていたということだ。他国の高官たちは彼の主張を重要視し，条約はまだ締結されていない時だけに一層彼の率直さには感心した。出発前我々の世話をした最も優れた役人たちに対する刀剣の一寸した贈呈式が行われた。人々は我を忘れて大喜び

したそうである。

夕方私は「アルコナ」号に乗船したが，そこはまだすべてが大混乱し，備え付け作業をする興奮でいっぱいだった。それから私は上陸し，そのほか広く別れの訪問が行われた。夕刻，私は食事のために「アルコナ」号に乗船していた。

1月30日　水曜日［万延元年12月20日］

今日は陸地にいる最後の日である。明日我々は出帆することになっている。私が到着して，ヒュースケン氏[1)]の遺品の競売が行われた。彼の友人たちが全員居合わせていて，品物が出来るだけ高価になるように気を配った。我々もそれには全く成功して，僅かな品物ではあったが1,000ターラー以上の金額になり，それは貧乏な彼の母には大変役に立つであろう。ただ残念なのは，きちんと政府に寄付されなかったことである。ヒュースケン氏の全財産をもう一度見るのは本当に悲しかった。その中には愛馬用の鞭もあったが，まだ血が付いていた。ガヴァー氏（Gower）がそれを買った。私は運よく日本製の小刀を1本を購入した。

その後私はジラール氏[2)]を彼の新しいイエズス会士の伝道館に訪ねた。まもなく宣教師の数が増えるらしい。しかしそれにもかかわらず改宗者の数は多分まだまだゼロのままであろう。成果は殆どないのにこれらの人々の情熱はどこから来るのか，不思議だ。現在ここにいる米国の多くの英国国教会派の宣教師たちはこの忍耐を感じさせない。彼らは給料900ドル，婦人は600ドル，すべての子供に特別に一定額が認められているけれども，それでも別な仕事に就いた方が彼らには有利であるように思われる。彼らの中の1人は横浜で商人に，もう1人は仕立屋に，3人目は医者になった。

マルテンス氏[3)]宅で私は，横浜にいる非プロイセンのドイツ人たちの条約に関する声をいくらか知った。彼らは勿論，関税同盟全体のための最後の条約の締結が成功しなかったことに怒り我を忘れており，少なくともプロイセン領事の保護を受けられ，かつ彼らの船がプロイセン国旗の下で航行してもよいという権利が与えられず，またオイレンブルク伯が，そしてこれは条約の条件になっているの

だが，特別な回状の中で，彼らは条約が発効する瞬間まで横浜に安心して留まってもよいと告げなければ，全体を失敗（Failure）と見なす傾向がある。私はマルテンス氏に伯の立場を明らかにしようとした，というのはプロイセンは，同州のために条約を結んでも，これらすべての小海賊国家の一つだけと協力する関心はなく，それとは反対に，それらの国々の利益と自国のそれを結びつけるのは特別に寛大な行為であり，他のドイツ人に対して後に領事の保護を与えることになるからである。勿論，全員高位の男たちは今後プロイセン国民に自分たちを受け入れてもらうように試みるであろう。彼らはプロイセンにとって特別に利益にならないだろう。 だがそれは，ますます高まることが期待されている東アジアにおけるプロイセンの影響力を少しではあるが強めるだろう。

一日中ひどい天気だった。早朝から雨と風が，陸の旅行をなるべく不愉快にしてやろうと競っているようだった。それに底知れぬ泥が加わった。２時にボートが私の若干の荷物（その中にはブロンズの花瓶と箪笥が含まれる）を船に運ぶことになっていたが，事態が変わった。荷物は水の中から拾い出さなければならなかったし，勿論，全く台無しになっていた。私自身は４時に乗船するつもりだった。しかし嵐と波は今やその最高潮に達した。私はそもそも今日何度も私の避難場所となったガヴァー氏とマクドナルド氏の許になお留まったが，ようやく７時なって「テーティス」号に向かうことが出来た。だが，そこでもなお雨と嵐は続いた。

１月31日　木曜日［万延元年12月21日］

「アルコナ」号と「テーティス」号は出港した。早朝８時に抜錨された。

江戸，1860年11月21日付の両親宛ての手紙より。

私は皆さんに江戸地域について殆ど書かなかったと思いますが，そこは全く特別に書くに価するところでした。というのは世界で江戸の周辺ほど高度な魅力を有する都市はなかろうと思えるからです。私たちは毎日うっとりしてそれを眺

め，毎日景観の豊富さに驚嘆しています。いつも昨日(きのう)に勝る新しい発見があります。江戸の周囲と遠くの山麓まで低地の平らな丘陵地が広がっていて，それには無数の小さな谷と山峡によって溝が造られています。唯一の平野は大川に沿って丘陵地へ沈んでいます。江戸は一部がこの平野にあり，一部は丘陵地が平野に変わるところに位置しています。前者には商業及び織物業に従事している人々の密集した家々があります。小さな高台には宮殿，寺院，庭園があります。私たちは丘陵間の窪地に泊まっています。一方の側には丈の高い黒々とした針葉樹が生い茂った，幾つも寺院のある小高い丘があります。こちらには大君(タイクン)＜将軍＞ないし世俗的皇帝の墓があります。もう一方の側には2，3の大名屋敷のある平らな高台がそびえており，下っていくと海岸に出ます。大君(タイクン)の墓がある丘を馬で迂回すると，平野の大商業都市へ出ます。その他の方面へ行くと，やがて庭園と寺院の屋敷の間で家々がゆったりとして，そして最後には畑と灌木林の間で散り散りになるところに出ます。大きな国道は存在せず，町から出ると一本の細い迷路と，登ったり下ったりする公園のような道と歩道があって，そこを歩くたびに新しい光景が展開します。ここには大耕作地や大森林はなく，広大な牧草地もなく大きな村もありません。あるのはあらゆる物の可愛らしい混合物だけで，つまり小規模ながらとても魅力的な変化があります。どこの僅かな土地も手入れされており，それは私たちの国にあるような庭地では殆どあり得ないことです。土地全体が収穫の半分を提供する代わりに小作民に貸し与えられています。誰も法律によって大土地を所有してはならないことになっているので，小作地を大事に扱うようになっているのです。穀物は小さな畑に種をまき，それから植え替えられます。規則的に穴を開け，そこへ数本の苗がまとめて植えられます。前もって肥料は与えません。だが後から1本1本の苗に水溶性の肥料が注がれます。そのようにして稲もナタネも育てられ，そもそも畑作はすべてそのようにして育てられます。それに完備した撒水施設があり，それによって絶えず水が引かれ，余分な水は排水されます。

活動的で勤勉な国民が散文的な感覚を持っていたら，国全体は大きな野菜園に

のように見えたでしょう。だが，日本人は世界の他の民族には殆ど見られないような，自然に対してすぐれた理解と愛情を持っており，それと，私たちには恐らく余りに瑣事と思われるような純粋で高貴な趣味を調和させているのです。前者の例は，江戸の28万戸の家々には，心をこめて手入れされていない庭を持っている家は一軒もないということに見られます。それがテーブルほどの大きさであっても，溶岩のかたまりで作った人工的な岩石群があり，そのすき間に小さな木や，花またはシダ類が生えています。私たちの国の大都市の家にあるぞっとするような小さなゴミ置き場に対比すれば，何という違いでしょう。

自然美に対するのと同じ感覚で住民はまた江戸地域の魅力を保ち，それを高めることも出来たのです。すべての傾斜地は広葉樹の灌木で覆われています。どの道も生け垣で囲まれています。畑と畑の間には多く小藪の道が伸びており，あたり一帯と同じく大きな畑地でも植樹されず，手入れもされていない樹木は見られないし，人口密集地ではもっとそれが多く，そこでは灌木林は小さいものばかりで，到るところその中に畑地が分散しています。地域全体，新しい木を同じ場所に直ちに植えない限り樹木を伐採してはいけないのです。同様な方法で地域の装いは数世紀以来維持されています。絵のように美しいグループ分けに関しては誰も日本人にはかないません。彼らは特に寺院に関しては一番美しい場所はどこか知っていますが，無数の寺院があり，江戸だけでも3,000以上の仏教の寺院があります。どの寺院もその特別の土地を持っていて，それはいつも見事な古い樹林，特に黒々とした針葉樹で覆われています。日本には独特の針葉樹があります。真っ先に挙げられるのはほっそりとして真っ直ぐな幹の黒っぽく，やさしい針葉樹冠の隠花植物です。枝の多いゴツゴツした幹のヒマラヤ杉は美しさではそれらに殆ど劣りません。その他多くの樹木があるが私は名前を知りません。広葉樹の灌木には私たちドイツの森には全く見られない多様性があります。椿は今盛りで赤と白の花が咲いています。それはどの家にもあって垣根や生け垣になっています。樫の木は大きくはないが，美しい葉をした多くの種類があります。

風景の大きな魅力は，一つには黒々とした森に包み隠された絵のような木造の

寺院であり，もう一つは住民の家々です。どの家も宝石小箱のようで，とてもきれいで清潔です。隅々まで変わらず細心の注意を払ってすべてが手入れされています。それらは全部が木と紙で日本風に簡単に作られているが，どこにも少しでも傷んだところはなく，少しでも欠けたところはありません。どの家にも刈り込まれた生け垣がめぐらされた小さな庭があり，矮性の樹木の生えた幾つかの人工的な岩石と，家を覆い隠す数本の巨木があります。外的印象は明るく，軽やかだが，内部でも絶えず明るさ，陽気，生気，活動が支配しています。それらの家々は風景全体に同様な性格を与えています。それらは集まって村になっていない時はいつも人々を絵のような場所に連れてくることが出来ます。

風景が個々のものから成っているところや，細密な形だけが集まって雑多な全体を作っているところはそれぞれどこか，詳細に述べることが出来ます。だが皆さん，個々のものが実に多様な方法で統合されているのを想像してみてください。そしたらどれも愛らしさ，優美さでは他に譲らないような非常に様ざまな風景が目に浮かぶでしょう。人々は絶え間ない純粋な楽しみを持っていて，それは貧困や悲惨を見ても，また不満で不愉快な顔によっても乞食やプロレタリアによっても，頽廃し破壊された美によっても，ゴミや不潔，或いは自然美に対して全く感覚を欠いた兆候があっても妨げられないのです。すべてのものが大体揃っている私たちの国では人は寂しい広々とした自然を探して訪ねるが，ここではその中の人間の作品が他のどこよりも高度な装飾なのです。それで騎行の際我々に許された限られた区域では私たちは，この豊かな自然が提供する豊富さを見飽きることがありません。

今ここでは秋です，一番美しい季節です。冬中それは変わりません。というのは私たちの感覚では本当の冬はここには存在しないからです。空気はきれいで澄んでいます。大雨が止んで，代わって滅多に途切れることのない日光が照り出しました。だが，とりわけここでは他のどこよりも樹木の秋の紅葉がこの季節の大きな誇りです。個々の樹木の広葉は我々の国の野生のブドウのように深紅色を帯び，そしてそれは大抵黒っぽい隠花植物のグループ分けにされるので，私たちの

ツェルビオンカ山（Czerwionker Berg）＜現ポーランド領カトヴィツ市の北方の山＞の秋の紅葉はここだったら高度により美しく，だが特に多様で，色鮮やかな変化が見られます。

私はいつも自分の筆が拙いこと，特に自然描写は全くよく出来ていないことを改めて感じています。皆さんは江戸地域について余り明確に思い描くことは出来ないでしょう。しかしそこは実に美しく，大都市の近郊でここほどのところはきっとほかにないでしょう。私たちにとってそれはその郷土的性格によって特別に楽しみの多いものですが，何と言っても非常に特有なものであるので，それに似たものは日本だけに存在します。

２月１日　金曜日［万延元年12月22日］より同３日　日曜日［万延元年12月24日］まで

我々は，我々の西への航行を遠くに押し流してしまった３日間の西からの嵐と戦わねばならなかった。金曜日の朝８時に風速11メートルを記録した。波が高くなった。確かに風雨の中を帆走を３時間ほど続けたのであるが，それでは船を抑えられなくなって，ひどく横揺れした。

２日夕刻５時45分，約40海里の距離の風上に八丈島を見た。この島は日本の偉人たちが追放された有名な島である。島の名前（Hatsidsü=80）は，どこも80フィート以下ではないという垂直の崖による。確かに，島の形ははっきりとした火山ではないが，だがそれにもかかわらずその火山的性質は殆ど疑いようがない。

船上の生活はだんだんとても不快になった。書くことも読書も出来なかったし，どこへ行ってもまともな仕事ができないし，静かに坐って居られなかった。船室は木の舷門によって暗く，床は海水でそこらじゅう水浸しになっていて，眠るか，甲板で嵐や寒さに曝される以外に方法がなかった。何人かは船酔いの発作を起こしたが，私は今回も元気だった。食事には大きな困難が伴った。睡眠はたびたび妨げられた。２日は皆よく持ちこたえたが，３日目は皆に不快感が現れた。夕方，船が風下に移されたら，特定されていなかった島々が我々の前方にあった。

やっと我々は北へバックした。

２月４日　月曜日〔万延元年12月25日〕

ついに嵐と単調な西風が通り過ぎた。気圧計は著しく上昇し，温暖な北北西の風が吹いた。両船は西南西のコースを取ったが，盛り上げに欠ける微風のためになお殆ど前進しなかった。ガラス戸が再び取り付けられ，まだ西からの波のうねりが少し妨げになっているが，我々は再びきちんと仕事ができるようになった。―― 午前中，我々は西方に女ガ島ないしサウス・アイランド，これは海中の小さな山であるが，を見た。11時に身の毛のよだつような暗礁が現れた。それらは王ウイリアム３世の暗礁と見なされた。２，３の小さな方丈岩の暗礁が海中から突き出ていたが，これは暗褐色の奇妙な形をしていて疑いなく火山岩である。打ち寄せる波が岩礁の上で激しく砕け散り，植物は全然発生できなかった。ただ鳥の群だけがこの奇妙な光景に活気を与えていた。たった今我々は岩礁の前を通り過ぎた，暗い霧の夜だったら衝突したに違いない。我々はそのような場所で座礁する残酷な運命を思い浮かべた。今，危険は容易に回避された。我々は東へ帆走し，その後南へ向きを変え，約２海里の距離のところで水深を測ったが，60尋（ひろ）＜360フィート＞でも海底にとどかなかった。それから我々は外の西の方へ進んでいった。Ｋ氏＜クルーゼンシュタイン＞[4)]は島の位置がペリーの地図では全く正しく表示されていないことに気づき，北緯31度54分東経140度６分と定めたのであった。我々はちょうど昼に，日光のもとすぐ近くを通過したので，この測定は正確かも知れなかった。太平洋のこの海域はまだ航行した人が少ないので，かなり多くの測定がまだ正確ではないようだ。

２月５日　火曜日〔万延元年12月26日〕

晴れた暖かい春の日で，空気は澄み，海には波がなく，風もなかった。波のうねりは思ったよりも早くおさまった。好都合な風は昨夜消え，我々は嵐によって東へ押し流された。今朝「アルコナ」号は蒸気を動かし，我々を曳っぱって行っ

た。本当の休養日になった。短時間で船体は洗われ，磨かれた。それからは何もすることはなく，乗組員は暇になった。全員暖かい春の空気に身をゆだねた。

黒潮は現在，不思議な方法で影響が現れた。航海日誌には最近の数日にそれぞれ20，10，７，17海里，24時間で東へ流されたと記されている。すべてこれらの報告は全然正しくない。この数日間は航行の決定は非常に困難だった。だが一定の海流があることは明白だ。――それは海水の温度によって一層目立って認識される。江戸湾ではいつも６度と７度と記録されていた。浦賀海峡の出口までは17度，１月31日12時。２時間後，湾の外側附近では海水は17度で，恐らく，南西から来る海水が冷却する時間がある大島の北東に我々が来るまでは，一定して17度ないし18度と記録された。ここでは突然12度に変わったが，数時間後，大島を回航した時（１日，早朝）は海水はまた17度になった。これ以後，海水の温度はそれ以下になることはなく，逆に18度ないし19度に上昇した，これは最も暖かい日中の空気の温度でもあり得ないような暖かさだ。この殆ど研究されていなかった海流の温度が普通の温度を著しく超えることは，たぶん驚くべき事実だろう。恐らく目立って大気が暖かいのは幾分かは暖かい海水のためでもあろう。西からの嵐が続く間は日本の２月の寒さはまだ変わらず，３日に温度が上がった。その後温度は，風は北方へ急に向きを変えたけれども，上がったままだ。夜でさえ暖かい。江戸では最後の日まで北風がひどく冷たかった。だが風の状況はここでは総じて少し異なる。江戸では冬中を通じて３日と西風が続いたことはなかったし，西風が起こると，土砂降りが付きものだった。それでもここでは上天気だった。

２月７日　水曜日［万延元年12月28日］

大気は特に午後と夕方はとても温暖だった。そして殆ど重苦しいほどに蒸し暑くなり，湿度が高く，不愉快だった。夕方に烈しく雨が降り，それによって波は急におさまった。

沢山の海ツバメが現れ，船について来た。これらの動物は波の高い海に身を置き，泡立つ波に烈しく上下に揺すられても，全然困らないように見える。彼らの

飛行力は非凡に違いない。広げた羽は弩(いしゆみ)の弧に似ており，殆どその運きは見られない。

2月10日　日曜［文久元年1月1日］

いや全く海の上では時間が早く過ぎる。我々のここまでの旅はこれ以上はないような最悪なものだった。 我々は約700マイルの距離を北東からのモンスーンの時期を既に11日かけて航行した，そしてこの間ずっと海が荒れていたので，ほぼすべての活動が不可能だった。これまでの航海は次の通り。江戸湾からのさんざんな出航に1日，西からの嵐の3日，1日半の部分的には無風のまあまの航海，1日半の順調な航海，大隅湾に至る前の3日の航行。それにもかかわらず私には時間はとても早く過ぎていった。

今朝見えてきた陸地は，薩摩の海岸の都井岬(Kap Danville)と火(ひ)崎[5]（Kap Nagaeff）（両者ともクルーゼンシュテルンによって名付けられた）であった。我々は近づき，両者の間に食い込んでいる，クルーゼンシュテルンが最初大隅海峡（Van Diemens-Straße）と思った大隅湾を見た。

2月11日　月曜日［文久元年1月2日］

昨晩は我々は殆ど航行しなかった。「アルコナ」号が我々の船を4～5ノットで曳航したのだが，ようやく朝になって早く曳航し始めた。しかし我々はそれ以外に烈しい海流と格闘しなければならなかった。それで朝7時に甲板に登ってみると，佐多岬（Kap Tschitschagoff）はまだずっと先にあった。種子島は依然として完全に我々の視野にあった。佐多岬に達するのに何と多くの時間を要したことか，奇妙だった。海流の反作用は明白だった。ついに10時に岬を廻った。この時から船は力強く西方に前進した。ここでは強い海流がこの方向に進んでいるようだ。それで黒潮は佐多岬に至るまでの日本海全体を領しているようであり，ここで殆ど反対の方に向いている別の海流がそれに隣接しているようだ。この海流は際だって強く南方へ流れていた。佐多岬からは我々は西方へ進んだが，今（正

午）我々は火山のすぐ近くにいる。

大隅海峡は非常に美しく興味がある。天候は絶えず変化する風景を楽しむには好都合だった。まず九州島の大陸は美しいが，際だっていない形で魅了した。左手の種子島は同様に非常に単調な形をしている。平たい山の背は海抜400～500フィートの高さで，完全に台地風で唯一つの特別な山もない。とりわけこの島の平らな形は際だっており，それによって向かい側の陸地の性格とも違っている。

佐多岬またはKap Tschitschagoffは九州の南端で大隅国に属する。岬の先端は幾つかの切り立った岩から成り，正面から見ると，そのうちの２つ大きな地峡を形成している。岩盤は火成岩であり，裂け目があるので北東に傾斜した地層から成っているように見える。打ち寄せる波は，海が荒れると，これらの岩で激しく砕けるに違いなく，とても荒々しい印象を与える。一番手前の孤立した岩のすぐ後ろには疎らな広葉樹で覆われた岩だらけの山が続き，さらにその北東には全く凝灰岩の性質を帯びた他の山々が連なっている。これらの山は南ティロールのパラッチョ（Palatscho）にそっくりだ。すなわち切り立った，角のある形はどこにもなく，むしろすべてが曲がり，傾斜があるが，急傾斜であり，一部は褐色の寒々とした草で覆われ，一部は，特に多くの山峡は樹木で覆われている。海へ向かって下り，そこで広がっている２つの峡谷には村落が認められる。だが，そこでは人々は何によって生活しているのか分からない。地形は畜産に向いているが，牛も羊も山羊も飼われていない。しかし全体としてこの土地は未開で，快適ではない。この岬から見た南方諸島の眺めは極めて美しく，遠くからでも開聞岳は見えるし，さらに見事な火山島も見えてくる。

開聞岳と薩摩 —— 佐多岬の悪魔のような岩壁を周航するやいなや，見事なプロフィルの山のある美しい海岸が長い線を描いて展開した。開聞岳はその自由で気高い姿によってすべてに傑出している。それは純然たる球形として海中よりそびえ立ち，富士山より急な坂で，先端が円くない。山の斜面は左右対称でそのまま海に落ち込んでいる。北側は薩摩の山々とつながっているかも知れない。海岸線を前にしてどうやら孤立して立っているらしい。この海岸線は単調な形の長

崎鼻[6]（Kap Rono）で始まり，開聞岳の背後の，大変深い湾である鹿児島湾の周辺の方へ伸びていて，湾の奥の端に薩摩の領主の居住地である鹿児島がある。水深が十分に深ければ，この入り江は日本のこの地域の最良の港の一つに違いない。湾の入口には荒々しく裂かれたそっけない，ギザギザにそびえる岩によって形成された海岸が見られる。さらに高い山が一つそびえているが，恐らく鹿児島の近くの桜島であろう。――クルーゼルシュテルンは開聞岳の下を通り過ぎ，開聞岳で始まる薩摩のあの平たい丘陵の海岸地帯へ向っていった，そして彼が見た美しい地方の心をなごませる性格について語っている。

硫黄島[7]または火山島は活火山で，諸島の中で最も興味深い島である。変則的な円錐形の山は，多くの溝としわのある傾斜地を持った険しい島で，海から直接2,324フィート（標高715メートル）の高さにそびえている。島の西と南西だけにはさらに山と，同じく草木の生えていない幾つかの岩山が続く。火口は大きく，大量の蒸気が噴き出ており，溝や割れ目からも出ている。私は島に上陸して，この島のために数時間を過ごすことをどんなに願ったことか。だが，そのような願望はすぐに消え去り，私は今回はスケッチで満足した。日本人は以前この山に神聖な恐れを抱いていて，誰もここに上陸したことはなく，山に登った人もいない。山には霊が住むとされた。そこで１人の意欲のある男が他の50人と共に，島を調査する許可を願い出たのである。それは許可された。島には多量の硫黄があることが判明した。それまでは硫黄層は雪と思われていた。現在この硫黄は薩摩藩主の主な収入源の一つとなっている。

２月17日　日曜日［文久元年１月８日］

殆ど18日の航海の後，ついに長崎に着いた。昨日の雨模様の天気は昨夜から今朝まで続いた。複製（コピー）にして持っていた，長崎港の英国の地図によって方向を定めるのは最初は困難だった。それだけに我々が進んできた方向が全く正しかったと分かったときは一層嬉しかった。

長崎の狭い湾の前には群島がかたまっており，その配置よって容易に間違った

入港路に迷い込むことがあり得る。野母崎で終わる陸地と，高島[8]及び伊王島[9]の間に広い入港路があるが，浅く，小さな岩礁と島がいっぱいある。これに対してこれら両者の北の方には立派な水路がある。ただ伊王島の岸辺近くには小さな暗礁があって，それは殆どまさに海水の表面まで達している。これらすべての島々の間にその形によって際だっている高鉾島[10] (Papenberg) が見えてくるが，まさにそこで止まってそれから南へ迂回しなければならない。2人の水先案内人がボートで近づいてきて，両船に乗せられた。彼らがいなくても（各船に水先案内人が1人で60ドルかかった）我々は同様に正しい水路を通って到着したであろう。風は，帆ではもうどうにもならない丁度そのとき止んだ。「アルコナ」号は曳き綱で我々の船を曳いて長崎港まで導いた。パーペンベルクという名前は，何千人もの改宗した日本人とともに彼によって海に投げ込まれたイエズス会の宣教師に由来するものだが，そこかからまもなくして少し拡がり，有名な港を形成している狭い湾に達する。11時に錨ががちゃがちゃ音を立てた。ロシアのフリゲート艦「スヴェトラナ」号の礼砲と，ブトコフ艦長，オランダ領事メトマン (Metman)，その他の諸氏の訪問が殆ど同時に行われた。

私は長崎湾への入港路の両側ほど美しい海岸風景は滅多に見たことがなかった。すぐ近くを船が通る小島は遠くに見える九州の海岸線と美を競っている。すべてが険しい岩と傾斜地とともに海へ落ち込んでいる。荒涼とした地域が想像される。だが，ここには人間の手で作り出し，作り替えたものが見られる。どんな小さい土地でも耕され，岩山の上には非常に美しい階段状の耕作地が見られる。村落は傾斜地に広がり，峡谷へ下る。険しい岩のギザギザの峰には人間の集落が見える。この変化がとても魅力的だ。湾は大きくはないが，小さな山間の湖のような通常の港である。

まもなく我々は全員が上陸した。最初に出島を訪れた。私はこのオランダ人の牢獄がこのように小さく，みすぼらしいものとは想像していなかった。なるほど家々は大変美しいが，島全体はプロイセンの兵舎より殆ど大きくはない。近年はオッパーホーフト氏が1人の秘書と毎年交代する1人の助手とともに住んでい

るだけである。時折，医者が１人一緒のこともある。以前は現在の家々の半数が立っていただけだ。島の残りの部分は庭園に当てられていた。勿論，現在ではオランダ人の居留地は拡充され，島全体が，親しみやすい様式で実用的かつ快適に作られた家々によって占められている。我々は出島にクニッフラー会社の支配人ギルデマイスター氏[11]を訪ねたが，そこに湾の素晴らしい眺望が得られる快適に作られた住居を見た。以前はこの眺望はずっと，閉じこめられた哀れなオランダ人たちの唯一の楽しみであった。彼らは壁ごしにその眺めを楽しまなければならなかった。この壁は住民が周囲の人々と自由にコミュニケーションするのを禁じるために島の回りを取り囲んでいた。自由で快適な生活を妨げるものとして考え出されるものが，出島では沢山用いられていた。同業組合長は我々を出島のバザーに案内したが，そこでは大きな部屋に漆(うるし)製品，ブロンズ製品，磁器類が展示されていた。しかし我々はこれらはすべて尊大なものだと見抜いた。我々の心をそそるものは何もなかった。

我々は今度は街を散策した。長崎は人口６万で，とても広大だ。大部分の家は谷間の平地にあるが，一部はやや高い台地にあり，その斜面には砦のように壁が築かれている。だが，あらゆる方向に谷が上まで伸びているが，それらは放射状にまとまり，そして次第に山峡に消えていくが，すぐ近くの高台には墓地や寺院や茶屋がある。道は迷路状に雑然として，勝手が分かりにくい。ごく少数の道だけが広く，きれいだが，大部分の道は狭く，とても田舎じみている。広大な大名屋敷も居城も人目を引く家々も見あたらない。すべてが小ぢんまりとした特徴を持っている。商店は２軒の陶磁器店を除くと大したものはない。大貿易の痕跡はない。この地域の人種は江戸のようには洗練されてはいない。特にそれほど美しい女性は見られない。だが着飾った姿は見かけた。数日前に始まった正月のせいだろう。街からすると長崎は州都にはほど遠いが，重要でないということではない。序でながら山の性格は紛れもなく長崎だ。

２月18日　月曜日〔文久元年１月９日〕

陽光にあふれた素晴らしい日だった。私はそれを利用してM氏<マルテンス>と苦力(クーリー)１人を伴い，なかなかよく整った山の一部へかなり大きな調査旅行(エクスカーション)を行った。長崎湾の端では２つのかなり大きな峡谷が海へ合流しており，それらは殆ど北へ向いた山脈を分けている。その山並の背に沿って進み，引き返し，それから東側の本来の長崎谷の端に行って，ずっと分水嶺から外れることなく進み町へ戻った。輪郭だけ見える山並は長崎近郊で墓地として利用されている急な斜面で始まっている。この墓地に行くには大変みすぼらしい市区を通る。山の斜面を上に登っていく最後のところでは，同じ場所で幾つもの道が重なりあって伸びていて，真っ直ぐに上に続いている他の道によって切断されて直角になる。墓地はとても記念碑が多く，よく手入れがなされている。斜面は不規則的に段丘状になっていて，どの段にもしばしば数多くの一族の墓がある。それらにはしばしば10～20世代の墓があるが，それは墓石を見れば分かるという。墓には草花が水に差してないということはまずない。

数本の樹木で占められている円い頂上の山は風頭山(かざかしら)[12]と呼ぶのだと私は教えられた。頂上は，山全体の粗面岩の礫岩から突き出ている固い粗面岩の小さな塊から出来ている。ここから見た長崎の町と，海岸と前に広がる島々のある港の眺めは絶景だ。さらに山並を目で追うと，幾つかの緑の円い頂上を経て一つの寺院があるが，これはすぐ近くまで迫っている山頂の次ぎにあって金比羅神社として知られている。そこへは町らとても快適な，敷石の，階段のある道が通じている。この寺は参詣者が非常に多いそうだ。多数の乞食が確かにそれを類推させた。15分で，この山並みの最も高い頂である金比羅山[13]の頂上まで行ける。ここは私には標高1,500フィートあり，そして風頭山(かざかしら)より700フィート高いように見える。ここからの眺望は素晴らしい。大村湾が眺められられるが，それは海面より低い窪地によって長崎湾とつながっている。分水嶺は僅かな高さにしか達していないよう見える。金比羅山の上には恐らく非常に古い石の寺院が建っているが，全体が四角の粗面岩の石柱で作られている。その様式と構造はとても興味深く，古代の

寺院建築の最初の痕跡を残している。内部には赤い太陽が昇ってくる様が描かれている。私は多くの通りすがりの人々が寺で祈りを捧げているのを見かけた。

金比羅山の北側の斜面はけわしい坂になっている。だが尾根の鞍状の窪地があり，そこを通って東側の谷の端から広い道が西側の谷の根元まで通じているので降りられる。すぐその下に浦上村がある。しかし本道は北の窪地から上の山の方へ向きを変える。これは江戸へ通じる大きな街道で，ケンペルはこの道を通って旅行した。私はそれを辿っていったが，まもなくして２本の石柱に出会った。それには碑文があってそこには，ここは長崎領であって，それとともに外国人が立ち入ってよい地所はここで終わり，大村領が始まると書かれているそうだ。私は少し先へ進み，美しい背の高い針葉樹林を見つけた。だが私はすぐに東へ向きを変え山の方へ登っていき，波状の穏やかな山の背を歩いていったが，この山の背は金比羅の山並と長崎谷の東側での境界となっている烽火山[14]の山並を結びつけ，そしてその北の分水嶺を形成している。その上に既に大村にあるネコンガシ村（Dorf Nekongasi）＜不詳＞の美しい山峡へ向かう幾つかの道がある。

烽火山山系の主な頂は概して南北の方向にあるが，しばしば片隅ではそこから逸れている。その最も高い頂は北側に位置し，そこはもう肥前である。それはKuratakiyama＜黒木山[15]か＞と呼ぶのだと私は教えられた。それは草木で覆われた円い頂の山で，金比羅山より400～500フィートほど高いだろう。その山の背に着いてみると，東から幾つかの川が注ぎ込んでいる島原湾を見渡せる素晴らしい景色が展開した。私が頂上に立ったとき視野が広がった。そこからは長崎，大村，島原の３つの湾と山並の配列が見渡せる。いい天気にもかかわらず遠くの方は非常にかすんでいた。山の上には高さ10フィートの円い形の石造りの建物が立っていたが，中は空っぽで，前方には丸い戸が付いていた。私は２日後にそれに似たものを茂木山[16]で見た。それにはわらがいっぱい詰まっていた。このことから私はそれらは本来の烽火として使われるもので，それによって江戸へ合図を送っていると類推した。

烽火山からすぐに長崎へ戻ってこれる。私は中位の高度のところで，遠くから

でも見える七面山妙光寺を訪れた。そこから魅力的な小さな谷間が長崎へ下っており，そこには寺院へ向かう道にだけに見られるような階段と歩道のある立派な道がある。

私が最初の調査旅行から満足して帰ってきたのは午後5時だった。

2月19日　火曜日〔文久元年1月10日〕

素晴らしい天気だったが，私はずっと船室で過ごした。長崎のオランダ海軍医として雇われているドクトル・ポンペ氏[17]は，彼が弟子たちを通じて集めた日本国中の岩石のコレクションを持っていると聞いた。ポンペ氏は何人もの日本の青年たちに医学を教えており，しかも彼は役人に監視されることなく弟子たちが彼の家に来ることができるようにしていた。私は午前中に松本＜良順＞[18]に会った。彼は大君(タイクン)の前の侍医の後継者である。彼は頭脳明晰で，2本の刀を差し，大変位が高く大名にも劣らないそうだ。午後ポンペ氏から私は司馬＜凌海＞[19]を紹介された。彼は21才の賢い青年で，知識欲が旺盛で，色々なことについて少しは知っていた。彼は佐渡島の出身でそこの鉱山について沢山話してくれた。彼は現在の幕府の体制について平気で悪口を言い放った。そして日本に欧州の礼儀作法が早く広まることを願った。

ポンペ氏は日本人の間で信望のある地位を占めていて，それはすべての商人をはるかに越えている。またそればかりでなく彼は心地よい，楽しい生活をし，大きな自宅に住み，2人の日本人妻がいる。だが何と言ってもその中で彼はいささか余りに良く日本の習慣に順応している。学問に彼は多大の興味を持っている。彼の自宅には出島の蔵書があり，つまりこれは幕府の財産なのだが，地質学に関関しては見事に選び抜かれている。ポンペ氏は私に彼が隣国の領主たちを訪問した時のことを語ってくれた。最初に彼は数人の男たちとともに薩摩藩主＜島津斉彬＞に招待されたが，藩主はその許可を天皇に願い出ていた。一行は特別な船で迎えられ，薩摩の首都の鹿児島へ連れて行かれた。そこは素晴らしいところであり，鹿児島湾は良港で，桜島のもとに固められているという。ポンペ氏は藩主の

ことを，彼の領地を産業と工場制度において大いに振興させた非常に賢明で，努力する男だと述べている。藩邸には幾人もの学者がいるが，彼らの該博な知識はポンペ氏を驚かせた。人々はいい暮らしをしていたが，客人たちには彼ら独自の欧風料理が出された。長崎へ帰った後，彼らは筑前藩主＜黒田長溥（ながひろ）＞から招待された。この男はもっと欧化されている。彼は男たちをヨーロッパ風のマナーで迎え，それぞれに毎日２頭の乗用馬を自由に使わせ，彼自身が生活し慣れたヨーロッパ・スタイルで彼らを持てなした。その後，肥前の領主＜鍋島直正＞もまたポンペ氏一行の謁見許可を願い出たとき，それは大君によって拒絶された。

薩摩藩は今，貢ぎ物を送られている琉球諸島とのかなり好都合の関係を維持するために，非公式な蒸気船「イングランド」号＜白鳳丸＞を上海から12万8,000ドル（法外な値段）で購入したが，薩摩藩はそのうち，10万ドルは銀貨の現金で，２万8,000ドルは石炭で直ちに支払うのである。

２月20日　水曜日［文久元年１月11日］

私は今日は素晴らしい天気のもとかなり大きな調査旅行を行った。それは長崎の南方にある山に向けられていた。長崎の町は海岸沿いにこの方向に向かって，以前は出島のオランダ人居留地と同じく孤立していた中国人居留地で終わる。私にはそれは出島よりずっと重要であるように思えたが，いい印象を与えない。家々は日本家屋と同じく簡単な作りだが，全然清潔ではなく，きれいでもない。商店の文字は大抵英語で書かれ，少しばかりシンガポールを想起させる。恐らく次第に中国人はここで自国の権利を主張するようになるだろう。ところで彼らはここでは，商売上の召使いや仲介人をしている横浜におけるのとは全く異なる役割を果たしている。ここでは召使いには専ら日本人がなっている。それは良いことだ。こうした器用で，注意深く，慎重な人々で，しかもヨーロッパ風の習慣をすぐに理解し，自分のものに出来るほどの召使いは見つからないものだ。

中国人町を過ぎると，やがて多くの領事たちが住み，西洋風の街が発達している谷間のはずれに出る。海岸に面した傾斜地には杭で境界が示され，平野には家

屋を建てるために細長い道が作られ，また谷間の出口の平地は粗面岩の礫岩で見事にならしてある。私は谷間を登って斧山に向かった。斜面は急だがずっと上まで耕作されている。ここほど畑作のために多くの労力を投じているところは世界の国々でほかにあるまい。石で構築された段地はしばしば高さ10～12フィートに達するが，幅は20フィート以上ではない。斜面全体にわたって段階式に登っていき，そして非常に完全な灌漑システムはいつも必要な水を給水する。様ざまの高さのところにある貯水槽は乾燥期用の水を蓄えている。これは耕作地を最初に建設した際の資本である。その次に来るのが，その維持と長く続く骨の折れる取り扱いである。人々は液状肥料を肩に担いで上の畑まで運び，庭みたいに種苗の世話をしている。

この合理的で徹底的な，下方の斜面の畑地の耕作と目立った対照を成すのは，上方の部分が全く未利用になっていることだ。長崎近郊ではそれらは以前は森林で覆われていたようだ。しかしそれは消失し，それを再び植林しようとする試みはすべて失敗したように見える。すべての尾根の標高800～900フィートは密集した草で覆われていて，それは殆ど全く未利用のまま枯れている。数頭の僅かな農耕用の雄牛がそれによって飼われている。しかしこれはまた，立派な山の草地がもたらした唯一の利益である。このように不毛のままの資本は非常に大きく，そしてこの方面でまだ進歩がなかったのは不思議だ。今日私が登った殆どすべての山はそうした例を示している。

斧山は粗面岩の礫岩から成る平らな丘で，上から長崎と湾の美しい光景が眺められる。北方の大きな半島には，ここから山岳がこの地方の極地である熊ケ峰へ向かって伸びており，そして長崎湾に注ぐ河川と島原湾に注ぐ河川の間の分水嶺を形成している。私はその上でこの地方の最も素晴らしい展望地点に達したが，そこは今日の良い天候のおかげで空気の清澄と透明性のもと2倍美しかった。私の足下の海には美しい谷と，森に覆われた，岩の多い山岳の末端を伴ったMori（茂木か）が横たわっていた。この海は入り江では紺色となり鏡のように滑らかであったが，そこには僅かな数の小舟が見られただけであった。だが最高の眺望

を作っているのが背景であった。つまり長い山脈で，形と明るさの点で，南ヨーロッパを想起させる。私は，島原半島の幅広い火山である雲仙岳ほど美しい形の山をこれまで滅多に見たことがない。それは標高6,000～8,000フィート位だろう。その両側で高い山が隣接し，それから北方へ，そして南方へ長い，段々下っていく斜面が続き，その後で北方に再び山岳があり，南方に海があって半島はそこで終わる。それは全く雲仙山系から成っている。大きな噴火口から噴煙が昇っているように見えたが，私には自信がない。これに続いて右手の背景には遠く肥後の山々が見え，さらにもっと前方には天草の島があり，これは長く伸びた山並が続いているが，これといって目立った形はしていない。この島は石炭，陶土，砂岩，ガラス工場用の原料，銅鉱，その他多くを産出する。

熊ケ峰への道は大変長い。ワラキヤ山地[20]のように山の背の上を丘を登ったり下ったりと続くのであるが，左側の海の眺めは十分に苦労の甲斐がある。ここはすべてが雲母片岩で，最初に出現してからそれだけで占められている。まもなくしてバラのつるとその他のつる植物が織り混ざった密集した藪が始まり，いささか歩き回るのを困難にしている。私は幸い２時に頂上に達した。ここからの景色はこれまでの山々からのそれとは全く違っている。３方が海で，多くの島と長い支脈のある景観全体は地図を広げたように横たわっている。

山脈の配置ははっきりと認められるが，その解釈は難しい。野母崎へ向かう山地は，熊ヶ峰山地を覆っているのと同様な密集した藪で覆われているので全体が黒々としている。遠方には東に雲仙と肥後の山々，西には五島列島が見える。

寒かった。我々はまもなく山を去り，急な坂をチガワ谷の方へ下っていった。道は不愉快で，見つけるのが難しい。下の方では道はジグザグして恐らく川を20回も渡った，というのは雲母岩の壁が，ある時は一方の側から，またある時は別の側から谷を狭くしているからである。我々は高鉾島の向い側の深堀村で海に着いたが，そこは依然として雲母片岩の中にあった。私はここから小舟を調達して，我々一行はそれに乗り「テーティス」号へ戻ったのだが，多く水中を通って行かねばならなかったので少し寒い航行となった。深堀村の２番目の突き出た部分で

再び粗面岩の地帯が始まる。

相当きつい登山の後で，海の上で戦艦の舷側に寝るのは実に奇妙である。私が海の生活と山の生活を統合できるのはここが最初である。

２月22日　金曜日〔文久元年１月13日〕

本日早く出港することに決まっていたが，またもや出発は延期された。私は午前中ショッピングに出かけた。当地の商店は，江戸は勿論，横浜の店とも比べものにならない。青銅品ではだだ一点，比較的新しい形の龍が巻きついた花瓶があるだけである。漆器は大したものではない。特に長崎で期待された陶器に関しては，全く失望した。ここには日本のオリジナルな陶器もなければ，本当に趣味と芸術的感覚で作られたヨーロッパ風のデザインを模倣したものもない。すべてが粗削りで，重く，それでいて安くはない。若干の大皿と２，３の花瓶が私の気に入っただけである。だが，それも大事な顧客に譲って，自分では何も購入しなかった。

午後私は，ムラヴィエフ伯の副官であるヒトロヴォー少佐の許を訪れた。彼は急使として様ざまな旅行をした後，妻とともにサンクト・ペテルブルクからエルサレムを経て，スエズまで来て，そこでＰ＆Ｏ船会社の蒸気船（Steimer）に乗り上海へ向い，つい最近長崎に来た。そしてここからヴィクトリア湾に渡り，アムール川，イルクーツクを経てサンクト・ペテルブルクへ行くつもりだが，そこに８月には到着したいと思っている。彼は以前７カ月北京の公使館にいて，中国との条約をサンクト・ペテルブルクへもたらした。そしてペテルブルクからイルクーツクへの道を既に３度往復した。彼はまたアムール川流域，オホーツク，カムチャッカを知っている。私は彼の中に優れたマナーを備えた愛すべき男を見た。ただ私には彼は少し言葉が大げさであり，度を過ごし勝ちであるように思われた。ヒトロヴォー氏はセメノフ氏の友人であり仲間である。彼は，彼と一緒にロシアの幼年学校（Pagerie）にいた。私のシベリア旅行計画を彼はとっくに知っていて，そのことに熱狂していたが，少し熱狂し過ぎであった。彼はまた私の旅

行が容易になるために出来ることは何でもすると約束してくれた。彼は私にシトカ[21]に行くのは思い止まるように言った。というのはニコライエスクに行く可能性がないままに，そこでまる一年留まることになるかもしれないからというのである。だがアリューシャン列島を訪れることは，多くの時間をかけ，あらゆる便利さを犠牲にしない限り不可能に近いという。毎年東インド会社のただ一隻の船がシトカからニコライエフへ通っているが，それはごく僅かな場所にしか接岸していない，個々の島々で私を追い回すことはとても危険で命にかかわるという。ブタコフ（Butokoff）氏の証言はそれとかなり一致するするので，私はその正確さを信頼しなければならないだろし，私の北東方面への諸計画，従ってブリチッシュ・コロンビア[22]へのそれも全く断念しなけれならないことを恐れる。

2月23日　土曜日［文久元年1月14日］

今日もなお我々は長崎に留まった。私は午前中を利用して西側の方面へちょっとした調査旅行を行った。最初に私は，3年前に幕府がオランダ人の支援を受けて建設した飽(あく)の浦の機械工場を訪れた。そこは今でもオランダ人の工場長ハルデス氏の指導の下にあり，数人のオランダ人がそこで働いている。その他の従業員たちはすべて日本人である。彼らは実によく仕事をこなすという。工場では新しい機械は作られずに，壊れた機械部品だけを修理している。小型の蒸気機関は種々の送風機の役に立っているし，それより少し大きい蒸気機関は小さな旋盤やボーリング機，押し抜き機等を運転するのに使われる。これらの機械の完成は日本人を非常に驚嘆させている。事業所は既にかなり広大だが，さらに拡張されるという。だが，日本人だけでそれを譲り受けようとすれば，多くの解約金を払わなければならないだろう。日本人は物ごとを解(わか)ったと余りに早く信じる傾向がある。つい最近彼らは英国から蒸気船を購入し，今まで数人のヨーロッパ人がそれに乗船していた。日本人が今指揮を取るやいなや，直ぐに事故が起こった。本日試運転をしようとして，ボイラーが爆発し，1人の日本人が死んだ。

機械工場と並んで小さな陶磁器工場がある。長崎の土と筑前のそれが混ぜ合わ

され，そこからまあまあ良い陶磁器が作られる。すべてが手作業で，ろくろさえも手で回転される。原料は水をどんどん吸い込む性質を持っている。彼らは粘土を荒っぽくこね，それをろくろに置き，同じ陶土から多くの道具類を作る。粘土を加工するために彼らはしばしば手を水に浸し，作業を急ぐが，多分それは陶土が水を吸い過ぎないようにするためと思われる。それから糸で切り取り，容器を取り去ると，アッという間に固まる。そのようにしてとても薄い皿も崩れないようになる。だがとにかくEgg-shell（卵の殻のように砕けやすい物）は長崎近郊の工場だけで作られているようだ。恐らくこの地域の粘土だけが水分をよく吸収する性質を持っている。

さらに小さなガラス工場もある。通常の工場には，天草の葉ろう石とオランダ・パイプ用の白陶土を混ぜたレンガ製の長さ，高さ，幅がそれぞれ約3フィートの3基の窯が置かれている。これがすぐれた耐火性の素材を生み出している。煙道と内部の部屋は良く作られている。原料は木炭を使って簡単に溶融する。原料は天草の海砂から成るもので，手で押しつぶして細かくし，それに炭酸カリウムと明礬を混ぜたものである。ガラスはとても白い。1人の男の作業員がかなり巧みに仕事をしていた。冷却用の設備は何もない。完成した器はすべてマットの上に並べられ，自然に冷却する。

工場の上方には稲佐山[23]が立ち上がっている。この山は約1,200フィートの高さがあり，我々の一行の多くが登ったのであるが，素晴らしい眺めだそうだ。私はその下方部分をあちこち登ってみたが，すぐに船に戻った。というのはそこには粗面岩の礫岩以外のものはなかったし，気晴らしになるものがある見込みもなかったからである。

私は午後別れの挨拶に行った。最初にヒトロヴォー氏の許を訪れた。彼はロシア居留地に住んでいる。ロシア人はそれを拡大し，他のどの国民よりも深く長崎に根を下ろしている。稲佐は，これは街区の名前だが，両側が海に急に落ち込んでいる，堅い礫岩の小さな台地の上に立っている。一方，他の側では海が少しばかり食い込んでおり，そのわきでは堤防だけで岩壁とつながっている陸地は絶壁

の下で次第に海へ落ちている。稲佐山は打ってつけの自然の要塞だ。ロシア人は数台の大砲でここから港と街を掌握している。彼らは将校たちの住宅，今は４隻の戦艦によって利用されている幼年学校，野戦病院，衛兵所等を建て，そして小さな湾の稲佐の横にドッグを作った。同時に彼らは取り入るのが旨いので，人々はつい我慢する。私はヒトロヴォー氏がＨ氏のことでとても怒っているのを見た，Ｈ氏は彼宛ての手紙ともう一通のムラヴィエフ伯宛の手紙で，「彼自身の小型蒸気船に乗って３人の水兵とともに」アムール川を航行する意向を伝えているからである。私は，Ｈ氏が私のシベリア旅行を台無しにするのではないかと心配である。

ヒトロヴォー氏は今月26日に長崎を去る。彼の秘密の使命は北緯43度以下のところに都市を建設することであると私は教えられた。それはヴィクトリア湾でしかあり得ないし，またもやロシア政府による帝国の国境線の確定的な拡張のための妙計と言えそうだ。

オイレンブルク伯は今日フォン・シーボルト氏[24]のところへ行ったが，私は残念ながら時間がなくて氏を訪ねることが出来なかった。彼自身，昨日と今日「アルコナ」号を訪れたが，私は残念ながらその時彼に会えなかった。伯は彼のことを頭が混乱していると評している，会話中に話題を次々に変え，最後まで頑張らないというのだ。彼の住居は斜面にあってとても感じがよいと言われ，あらゆる種類の日本の品物の博物館になっているそうである。その横には植物園があり，飼い慣らされた動物や色々な珍しい物がある。シーボルトには最初の日本滞在時の30才のハーフの娘がおり，産婆及び女医として働いている。さらに彼は家にヨーロッパの女性との間の13才になる息子がおるが，その息子は賢い美少年で日本語を上手に話し，来年幼年学校の生徒としてロシア海軍に入ることに決まっているという。ヨーロッパの彼の家にはシーボルトの子供が数人いるという。それ以外に現在３人の日本人の夫人がおり，それぞれ１人子供がいる。シーボルトは２年前オランダ政府に雇われて，顧問として株式会社に仕えていて，報酬として月1,000グルデンを貰っている。だが今月彼の顧問としての勤務年限は満期にな

る。彼はここではそのような立場にいられたので，彼はロシア人以外のすべてのヨーロッパ人とは敵対関係にあった。ロシア人とは絶えず付き合っている。それでペリー来航記にあるように，彼をロシアのスパイと呼んでも不思議ではない。シーボルト氏は疑いもなく日本について一番よく知っている。彼は日本語を話し，日本語の書物を読むが，彼が出来ないところは彼の娘が助ける。彼の原稿は膨大な量になり，多くの解明が期待されているという。

シーボルト氏が日本政府に影響力を持っているかどうか，についてはこれまで誰も知らないが，いろいろ推測されている。今私は，彼は顧問として大君に招聘され，「イングランド」号で江戸へ行くことが決まっているとの秘密を告げられた。それが本当なら，彼は目前の事態の改変にきっと大きな影響を与えるだろう。彼は長崎において非公式に次のように語った。大阪は決して外国人には開かれず，横浜と函館は再び閉鎖され，長崎だけが開港を続けるということにすべきだと。彼がこれらの原則を江戸で通すなら，日本政府は用心してほしい。そういうことになったら西欧列強との大戦争は避けられないし，現状ではむしろ敵国に対する幕府を支援するするだろうが，やがて幕府に敵対するようになるだろう。

2月24日　日曜日〔文久元年1月15日〕

我々は今日出港した。早朝5時に船上での営みが始まり，出港の準備がすべて整った。7時に両船は抜錨し，「アルコナ」号は我々の大索を受け取り重荷のために蒸気を出した。楽隊がロシアの賛美歌を演奏した。「スヴェトラナ」号が感謝のため17発の礼砲を打ち，それに「アルトナ」号が応えた。空気はなま暖かく，風はなかったが，くすんでいた。我々はもう一度，湾の美しい海岸と港口の両側の島々を眺めた。その後まもなくして五島列島が目に入った。「アルコナ」号は9時に大索を下ろし，我々は微風を受けながら西方へ向かった[25)]。(終わり)

訳注

1．ヒュースケン（Henricus Consadus Joannes Heusken, 1832-1861）オランダ人。駐日米

国公使館付通訳。米国弁理公使ハリスは，日晋条約締結交渉のためドイツ語のできるヒュースケンを差し遣わした。だが，1861年１月15日プロイセン代表団の宿舎からの帰途，赤羽根橋近くを馬で騎行中，浪士に襲われ斬殺された。

2．ジラール（Prudence Girard, 1821-1867）幕末期フランスのカトリック宣教師。1850年フランス総領事ベルクール付通訳官兼領事館付司祭として来日。横浜居留地にカトリック教会天主公会堂を建てた。

3．ドクトル・フォン・マルテンス（D, v, Martens）動物学者。のちベルリン大学名誉教授兼ベルリン自然博物艦長。

4．クルーゼンシュテルン（Adam Johanna von Krusenstern, 1770-1845）ロシア軍人で航海者。1803年クロンシュタットを出帆，翌年（文化１年），長崎に入港。日本海を北上し，樺太，千島を探検した。1806年世界一周を終え帰国した。のち海軍大将。邦訳に羽仁五郎訳注『クルウゼンシュテルン日本紀行』上・下（異国叢書）がある。

5．火崎：鹿児島県肝属郡内之浦津代半島の先端の岬。

6．長崎鼻（Kap Rono）：鹿児島県薩摩半島の先端の岬。岩石から成り景勝地として知られる。

7．硫黄島：枕崎市の南方50キロの東シナ海に浮かぶ安山岩と溶結凝灰岩からなる島で，周囲18.5キロ，11.8平方キロ。 最高地点は703.7メートル。霧島火山帯に沿った海底火山の一つ。鹿児島郡三島村に属する。別名「鬼界ケ島」。俊寛伝説等の史跡がある。硫黄岳の硫黄採掘は長年の島唯一の産業であった。近年，観光地として見直されている。

8．高島：長崎県西杵郡に属し，長崎港外に浮かぶ面積1.27平方キロの炭坑の島。

9．伊王島： 長崎港入口の島。面積1.24平方キロ。慶応４年に日本最初の６角形鉄製灯台が作られた。

10. 高鉾島：長崎港外の無人島でオランダ人によってPapenberg（伴天連の意）と呼ばれた。

11. ギルデマイスター（Hermann Gildemeister, 1836-1918）ドイツの商人。1858年長崎に来た。まもなく日本における最初のドイツ商社クニッフラー会社の社員となり，のち支配人となった。日本についての報告で注目され，1866年日本にける最初のプロイセン領事に任命された。

12. 風頭山　長崎駅より東方３kmに位置する標高597メートルの山で，風頭公園（151㌶）には坂本龍馬の銅像がある。

13. 金比羅山は島原鉄道の小野駅の南側にあって標高366メートル。別名小野岳。長崎市のほぼ中央に位置しており，市街地より比較的楽に登れてファミリーハイクの馬として親しまれている。頂上からの展望はよく，長崎市街地から長崎港へ一望でき，さらに雲仙岳，多良岳連峰が眺められる。

14. 烽火山：標高426メートルの山。もと斧山または遠見岳と称していたが，寛永年間に異国船の入港を発見，通報する烽火台が設けられたことから烽火山と呼ぶようになった。頂上からは東に橘湾をへだてて雲仙岳，南に長崎港と長崎半島，北に大村湾や多良岳は遠望でき

る。長崎七高山の一つ。

15. 黒木岳　諫早市と佐賀県の境に位置する標高881メートルの山。円い頂上で知られる。
16. 茂木山：茂木は長崎市の東南，千々石(ちぢわ)湾に面する港町。茂木ビワの産地として知られる。茂木山とは南部の山麓地帯を指す。
17. ポンペ（Pompe von Meerdervoot, 1828-1908）オランダの海軍軍医。1857年（安政4年）オランダ第2次海軍派遣隊の一員として長崎に来た。幕府，諸藩の医者，医学生を多数教育。
18. 松本良順(1832-1909)：医者。蘭疇と号した。下総佐倉藩医佐藤泰然の子。1950年(嘉永3)藩命により長崎に遊学，オランダ人について医学を学び，ポンペと協力して日本最初の洋式病院「養生所」を開設。のち江戸に戻り，文久年間徳川家茂の侍医を務めた。
19. 司馬凌海（1839-1879）維新期の医者。佐渡出身。蘭人ポンペに師事。語学の天才として知られた。明治初年に東京下谷練塀町に日本最初の独逸学塾「春風社」を開いた。門下に多くの医学者やドイツ語学者が輩出した。
20. ワラキヤ山地：ルーマニアの一地方。ドナウ川の北に広がる大平原の中にある。
21. シトカ（Sitka）：アラスカの太平洋に面した都市。ロシア領時代の行政の中心地。
22. ブリティッシュ・コロンビア州：カナダの最西端にあり，北米で最も山の多い地域。州都はビクトリア。
23. 稲佐山：長崎市の西側，南北に連ねる尾根の中心が稲佐山（342メートル）である。
24. フォン・シーボルト(Philipp Franz von Siebold, 1796-1866)ドイツの日本学者。博物学者，医学者。長崎オランダ商館の医官として文政6年来日，安政6年オランダ商事会社の顧問として再度来日，鳴滝に塾を開き診療と医学の授業に当たり多くの弟子を養成した。また日本の動植物を研究。著書に『日本』『日本動物志』『日本植物志』など。
25. プロイセン使節団一行を乗せた「アルコナ」「テーティス」両号は長崎を出航，上海へ向かった。そして天津経由で北京へ着いた。だが当時中国では学術調査が許されなかったので，リヒトホーフェンら学術部員は上海から台湾，フィリッピン，セレベス経由でジャワに着いた。その後タイでオイレンブルク伯一行と再び合流した。そして一行がドイツへ帰国する際，リヒトホーフェンは彼らと別れ，地質調査のため北米大陸へ向かった。